

日・朝両語比較研究上の問題点

『長田夏樹論述集（下）』第32章

（原載：『東国大学校日本学研究所・日本学』第7輯，1988年4月）

「はじめに」ではグツラフ、アストン、大矢透、白鳥庫吉、金沢庄三郎、ラムステッド、グルンツェル、藤岡勝二の順にアルタイ諸語、朝鮮語、日本語の比較研究が概観され、日朝両語の古い言語資料が紹介される。朝鮮語史資料には『旧訳仁王経口訣』が含まれている。第1節「言語類型学的比較研究」では、日朝両語とアルタイ諸語の共通項として、(1) 語順の一致、(2) 名詞・代名詞の格表示法の一致、(3) 出名動詞の構詞法の一致、(4) 動詞の時制を表す活用形の一致、(5) 母音調和の一致が挙げられる。母音調和については2頁以上にわたって、チュルク語、モンゴル文語、満州語文語、中世朝鮮語、上代日本語の例が挙げられ、上代日本語より古い日本語(上古日本語)の母音体系を次のように復元する。

男性母音 a o 女性母音 ä 中性母音 i u

第2節「音韻体系の共時的通時的比較研究」では、現代両言語の差異を4点挙げ、それらの古形を論じる。4点とは(日：朝の順)、(1) 5母音：10母音、(2) 子音の2項対立：3項対立、(3) 音節構造のCVC：CV、(4) 閉鎖音の鼻音化が起こる：起こらない、の諸点である。(1)は小倉進平『朝鮮語方言の研究』(1944)と『朝鮮物語』、『和漢三才図会』等の江戸期資料から「・」を /o/ と見、「ㄱ」を moix < morix と『書紀』の「ムレ」から /o/ に復元する。後者は河野六郎、李基文の所説と叶うが、「・」を /o/ と見るのは今日の観点からはうべないがたい。(2)は激音が後続 x の逆行同化によって平音から転じたもの、濃音も CVCV > CCV > qCV の変化を経たもので、古くは平音1系列であったことが論じられる。x の逆行同化が去声のアクセントを生んだことも指摘される。(3)については同系論のさまざまな点にならないことのみが述べられ、(4)では閉鎖音の鼻音化と「ㄴ」、「ㄹ」の glide の破裂をこれに関連付けている。(4)の傍証として『朝鮮物語』の「四 ぞをい、七 じりこぶ」、『和漢三才図会』の「四 止伊、七 知留古布」を挙げている。閉鎖音の鼻音化と「ㄴ」、「ㄹ」の glide の破裂は直接には結び付けがたい。第3節「民族言語学的研究」、第4節「言語年代学と基礎語彙」は「東臆」等の再録である。第5節「主音型対応から主意型対応へ」は、形式の類似よりは意味の対応を重視する(例：花 koc：草 kuca でなく koc：pana) という旨の宣言である。Vogel：fowl はどうなるのかという疑問が頭をかすめるのをやはり禁じえない。(伊藤英人)